

禁断の匂い～義姉の性臭～

直輝／NAOKI

—

今日もヤスジは、勉強机の前に座りブリーフを膝まで下ろすと、鼻に義姉の下着を押し付けて、痛いほど堅くなったそれを右手でしごいていた。

「あああ.....姉ちゃん、いいよっ、姉ちゃんっ、してえよおお.....」

椅子がきいきいと音を立てる。ヤスジのいきり立った二〇センチもある太いペニスの先からベトベトした透明の液体が溢れ、手がベとついている。ティッシュで拭い取っても、次から次へと溢れ出てくる。ヤスジはティッシュをごみ箱に捨てる。ごみ箱の中にはここ数日間に性を処理し続けた後のティッシュが、生臭い匂いを漂わせている。

さっきトイレに行った時、その横の風呂場にある洗濯機の中を何気なく覗いた時、姉の下着を見つけたのだ。

義母のそれもあったが、デザインと大きさと形で判断が付いた。

早速それを自分の部屋に持って返り、姉の女性器の当たっていた部分の匂いを嗅いでみると、たまらなく欲情してしまったのだ。

オナニーする時、いつも姉の下着を洗濯かごから盗み出してきた、匂いを嗅ぎ、口に含み、

最後はその下着の中に熱い欲汁をほとばしらせた。

下着の汚れ具合も日によって色々で、多い時、少ない日があった。特に下着の汚れがひどい日などは、昨日はやったのかな、などと思うと、余計に興奮してくる。

拭ったばかりの先走り液がまた滲んできて、粘り気のある液体が手に付く。滑りがよくなり、肉棒を抜く手の動きが速くなった。

クチュ、クチュ。

「ああ.....気持ちいい.....」

パンツがベッドの隅に脱ぎ捨てられて、上はシャツ、下半身丸出しの無防備な姿で、ヤスジは夢中で勃起したペニスを扱いた。

「はあ、はあ、はあ.....。ああっ、このチンポ、姉ちゃんに入れたいよお！」

ヤスジの瞳の裏には、自分の目の前で股間を大きく広げて、ヤスジがまだ見たこともない淫裂を激しく慰める義姉の玲奈の姿があった。

「はあ、はあ」

ヤスジは時々足をピンと伸ばしたり、射精しそうになると手を休めて亀頭を撫でたりした。

「はああ、姉ちゃん、姉ちゃん」

扱いたり止めたり、たまに陰囊を軽く撫でたりしていたヤスジだが、だんだん肉棒を抜く速度が速くなってきた。

フィニッシュが近づいてきたので、箱からティッシュを抜き取って、その時に備える。

手の動きが早くなる。足がピンと張った。

「あああっ！ 姉ちゃん！ もういっちゃうよ！」

ギシッ、ギシシッ.....

ベッドの軋む音が強くなってきた。

「うっ、うっ、うぐっ！ でっ、出る、出るっ！ うっ、うっ、ううっ！ くっ、いくっ！」

手の中で肉棒はズキンと脈打ち、鈴口からドクドクと白い液体がティッシュに向かって発射された。

ビクッと微かに動いたあと、部屋が急に静かになった。

萎え始めた肉棒を丸出しのまま快感に浸り、ヤスジはしばらく呆然としていた。勢いよく放たれた精液がべっとりついたティッシュペーパーから生臭い男の子の匂いが立ち上ってくる。

「また、やっちまった.....」

ヤスジは尿道に残った精液を搾り出し、ティッシュで拭くと、異様な臭気を漂わせている屑入れに捨てた。

義姉の玲奈は、誰でも入れる三流大学の三年生。しかし、美人でスタイルも抜群で、先日道を歩いているとき、ある芸能事務所のスカウトマンに声をかけられた。グラビアアイドルとしてデビューしたのは先月のことだ。

写真の中で身に着けていた真っ赤なビキニは、手のひらがあれば隠れそうな程の三角形が

結び合わさったものだった。発育が良すぎる胸の大きなふたつの球形は、窮屈なビキニの布を突き破らんばかり。引き締まった腹部の下には食い込んでよじれたもう一切れの布があり、尻の谷間に痛いほど食い込んでいる。

「どう、セクシーでしょ？」

グラビアの載った巻頭ページをヤスジに見せながら姉は言った。

「そ、そうだね」

一方、どぎまぎする弟を挑発するのが玲奈にはたまらなかった。姉は知っていた。この後この純真なくせに人一倍性欲だけは強い高校生の義弟が、このあとどうなるかを……。そして、玲奈自身もそんな義弟の「みだらな姿」を想像して、指で「あそんで」しまうのだ。

ヤスジの父親と玲奈の母親が再婚したのは、今から二年前のことだった。父親は海外へ単身赴任、母はキャリアのバリバリという家庭で、姉と弟はほとんど放任状況だった。夜遅く帰宅する義母。玲奈は家事はしないので、掃除、洗濯、きょうだいの食事の世話は家政婦がしている。

血の繋がらないきょうだいは仲がよかったが、ヤスジが思春期を迎えるようになった頃、一つの変化がもたらされた。それは、姉の玲奈に対する弟の強い性的関心である。

最近、ますます色気づくようになった玲奈。バスケットボールで鍛えた引き締まった脚と尻。それをかろうじて隠すくらいの短いプリーツスカート。ブラウスはいつも大きくはだけられ、発育著

しい胸の谷間は大きく露出されている。

「ただいまあ」

ヤスジが見ているのにかかわらず、階段を二階へ上がる玲奈は余りにも無防備だ。下から見つめる弟に見せつけるように、スカートの裾をひらひらさせて階段を上がる。動くたびにパンティは玲奈の引き締まった尻にクイクイと食い込んでしまう。

「もう、だめだ……」

姉のそんな姿を見たヤスジはすぐに自分の部屋に飛び込み、いきおいよくパンツをおろすと、あの行為にはげんでしまうのだった。

そして、勢すさまじく熱い液体がほとぼしり去ると、義姉をおかずにした深い罪悪感に苛まれることになるのだった。

二

全裸で絡み合って何分過ぎたかな？ 二人は裸で汗に濡れて、ぬめぬめしている。

「はっ、はあああっ、はあっ、アキト、は、早く入れてってばっ！」

ここはアキトが住んでいる木造アパートの二階の一室。

机の隣には木製の古いベッド。しばらく布団干していないのか、シーツはじっとり湿り気を持ち、閉められた窓とカーテンを通して雨天の鈍い光が差し込んでいる。

アキトは玲奈のカラダの上に乗っている。玲奈が求めているものを突っ込まないで、両側の
ピラピラを亀頭で弄んでいるのだ。

「ねえっ、いじわるしないでさあ、ああん、ああん、入れてよっ、ねえっ、入れてええってばあ」

汁気の多い玲奈の体内から益々熱い粘っこい液体がどくどくあふれ出てきてシーツを濡ら
す。

アキトは右手で亀頭部を握ったまま、それを左右前後に動かして玲奈をじらせ、周縁の花
弁を愛撫し続けている。亀頭部で玲奈をシゲキしているので、アキトは射精したくなってきた。

「ふんっ、んっ！」

肛門を閉めて射精をこらえる。

「ねえっ、いやあん、ここで出さないで！ はやく、ちょうだいっ！」

「へへ、まだやらねえよ」

亀頭部を入り口で待機させたまま、アキトは玲奈に覆いかぶさって、右の乳首を舌で舐め
上げる。両乳首がピンピンに突起してくる。

玲奈はたまらず、アキトにカラダを押し付けてくる。するとアキトは息を吸い、下腹部を引い
て亀頭を後ろにずらすのだ。

「いやあん、いじわるう、いやあんてばあ」

「くださいって、いうんだよ。」

「くださいって、は、はやくくださいってえ」

「何を、なにを欲しいんですか、玲奈さん？」

「いやあん」

「いえよ、アキトさんのおっきなチンポが欲しいって」

「いやあん」

「いわねえと、やらないって」

「いやあん、ア、アキトのおっきなチ.....」

「きこえねえよ」

「アキトさんのおっきな、チ、チンポがほ、ほしいっ」

「へへ、このドスケベ女、ドヘンタイ！」

「やあん、アキト、サイテー！」

会話の間にも、アキトはずっと玲奈の乳房を舌で愛撫しながら、右手で亀頭を支えて、それを玲奈の敏感な部分に押し当て、こねくり回す。ますます、どくどくと熱いジュースが玲奈の奥から溢れ、シーツを汚す。

「え、で、チンポをどこにいれてもらいてえんだって？」

「れ、玲奈のだ、大事なとこに.....」

「大事なとこってどこ？」

「だからあ、やああん、もう、やあんてばあ！」

「玲奈の、オナニー好きで濡れやすいマンコだろーが。オトコのちんちん食べつくした、やらしいマ

ソコだろーが。」

「ばかばか、いえないわよお。あたし、アイドルなんだからねっ」

「へっ、アイドルが聞いてあきれるってよ。あんな布っきれみてえなビキニで尻くねくねしやがって。

おまけにあのブルマーのシーンなんか、まるでA Vじゃねえか。おめえのD V Dで、どれだけの男がチンポマッサージしたと思ってるんだ？」

「ひどい！」

玲奈は全力を振り絞ってアキトの右手を左手の長い爪で搔き毟ると、アキトの手を引っ込めさせた。

「い、いってええ」

アキトの右手に鋭い爪あとが長い数本の直線となって残り、一本からは 血がにじんでいく。

「いってええ、やりやがったなっ、食らえっ。ふううんっ！」

右手でアキトはいきり立ったそれを掴んで一気に玲奈の中へ押し込み、体を密着させる。

奥まで突き刺せとばかりに、下から玲奈の膣深く突き上げる。

「ふんっ、うんっ、ん、ふんっ」

「はあん、ああん、いいっ、アキトっ！」

玲奈の乳房が前後に激しく揺れる。いつもの右側から、アキトは口いっぱい乳房を口に含むと、舌で乳頭をころがす。そして口をすぼめて乳頭を吸い上げ、引っ張るように愛撫す

る。

「ハっ、ハっ、ハっ」

ちゅっ、ちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ、

長い前戯の後だけに、玲奈のラブジュースがたっぷり付いた結合部はいやらしい音を立て

る。

玲奈は快感を得ようとして、M字に開いた両脚を交互に動かしてアキトを奥へ奥へといざなう。そして一番奥まで到達したと分かるとカラダを激しく前後運動させる。

「ア、アキトっ、お、おくを、奥を突いて、お、もっと奥をつ、突っついて」

「玲奈、い、いいぜっ」

「アキトっ、あっ、あっ、あっ、お、お、奥お、突っついて、もっと突っついてえっ！」

「玲奈っ、お、おまえ、ほ、ほんと、名器ってか、し、しまりがいいっ、いいっ」

「じゃ、こうやって、もっ、もっと、締めてやる」

玲奈は好色な舌なめずりをしながら、鼻腔をひくひくさせて、名器といわれるその内部を締める。

「れ、玲奈っ、き、キク！」

アキトの力が出っ張って、玲奈の道筋を広げるように刺激する。その快感がたまらない。

そういえば、この前こっそりバスルームを覗いたが、弟のもアキトに形や大きさが似てる。腹筋の締まったところや、小さく形のいい尻もそっくりだ。

ヤスジを食べてみたい……。そんなことを考えていると、奥からもっといやらしいジュースがあふれてくる。

じゅくっ、じゅくっ、じゅくっ、

ピストン運動の度に、なんていやらしい音がするんだろう……。

あたしって、こうも淫乱なんだろうか。

アキトは今度は気が狂ったように、玲奈の唇を求め、玲奈の中へ舌を入れてくる。玲奈はそれに答えるようにまるで蛇のように舌を絡み合わせる。

ヤスジもきつと、こんなだわ、あいつも激しい性格してるから……。

ああ、ヤスジとしたいっ、ヤスジに激しく抱かれないっ。

アキトと絡みつつも義弟の逞しいカラダを欲している自分。でも、それはイケナイこととして、アキトに逃げたい自分。

いったい、自分が飲み込んでいるのは、アキトのソコなのか。

この生暖かいジュースは、ヤスジに捧げているのではないのだろうか。

罪悪感はいっその欲望となって、玲奈のカラダを焼き尽くす。

「はうっん……はっ、ああ、大きいわ！」

恥唇が振れて、切ない刺激が体中に満ちた。

二人は一度離れ、今度は玲奈が上になった。腰を落とすとアキトの太いペニスがズブズブと音を立てるように膣肉にめり込んでいった。上半身を屈めて、二人の性器が結合している

一点を見つめながら、玲奈は歓喜の声をあげた。

「あぁっ.....入ってく！ アキトに犯されるの！」

「おお.....凄い。玲奈の中、いつもより熱いよ.....」

喉元から絞り出されたアキトの唸るような声を聞きながら、玲奈はゆっくりと腰を落として、根元まで剛直を挿入していた。

「ううっ.....あぁっ！ いいっ！ すごくいい！」

玲奈は挿入の快感を味わいながらぴったりと股間を合わせ、円を描くように股間を擦りつけていた。

アキトは玲奈の腰に両手を回して抱き寄せた。そして、髪の毛の匂いを嗅ぎながら、腰を下から突き上げ始めた。

「あうんっ.....！」

顔に押し付けられた玲奈の大きな乳房を、アキトが手で乱暴に揉みしだいた。

「あうっ！ はン！ っく、はっ、はぁぁあ！」

固くなった乳首を指を摘ままれて、玲奈は小犬のように泣いた。

「玲奈！ いいよ、気持ちいいっ！」

「私もよっ.....！ 凄く良くて、すぐにイっちゃいそう！」

玲奈が切羽詰まった声で叫んだ。

「玲奈！ すごく締まるよ！」

「ああっ！ アキトっ！ だめっ！ いっちゃうそうっ！」

「いっていいぜ！ 見てやるから」

ジユプ、ジユプと室内に響く卑猥な音のピッチが早まっていった。

「ああ.....あ、アキトっ！ イク、イク、イツチャウ！ ああ、ダメ！ ほんとイツチャウ！ ああ、あ
あ、ああ、イク.....ッ！」

玲奈は大きく上体を逸らして絶頂に達した。

「ああ.....アキト.....私.....もうだめ.....」

「何言ってるんだ、玲奈。これからだぞ」

アキトは玲奈をベッドにうつ伏せに寝かせると腰を持って引き上げた。

「さあ、四つん這いになって、その可愛いお尻を突き上げるんだ」

「ああ.....恥ずかしい.....」

玲奈はベッドの縁に両手を突いてアキトに尻を突き出した。

アキトは両手で玲奈の秘裂を広げると、背後から貫いた。

「.....あああっ！ あ、熱い！」

玲奈が、高い声をあげながら、背中を弓なりに反らした。

玲奈の膣肉が、アキトのペニスにきゅるきゅると絡みついてきた。

アキトは玲奈の狭い膣内にペニスを根元まで埋め込み、中の感触をじっくりと味わった。

「どんな感じ？ 玲奈」

「あああ……。気持ちいい……」

「ちゃんと言わないと、抜いちゃうよ？」

そう言いながら、ずりずりとペニスを引き抜いていった。

「ああん！ いやあ！ 言う、言うからっ！」

きゅっ、と膣肉を締めつけ、ペニスを逃すまいとしながら、玲奈が慌てた声をあげた。

「どう？」

「お、おっきくて……熱くて……すごく、感じちゃう……ああっ！」

アキトは玲奈の尻肉つかむと、さらに奥に到達するように、ぐん、とペニスを突っ込んだ。

「あああああっ！」

「ほら……こうすると、もっと気持ちいいだろ？」

戻り返ったペニスを抽送を繰り返しながらアキトが訊くと、玲奈は、こくこくと肯いた。アキト

はそんな玲奈の尻を優しく撫でながら、ぐっ、ぐっ、と抽送を続けた。

「あああっ！ そ、それ、それ気持ちいい！」

「すごいよ、玲奈の中、熱くて、ぐちゅぐちゅだ……」

「やん、やあん！」

「最高だよ……玲奈、ぐいぐい締め付けてきて堪らない……もう、出そうだよ……」

「あん……あたしも、もうイキそう……ね、激しく突いてっ」

玲奈はシーツに乳房を押し付け、張りのある尻をさらに高く掲げた。

「玲奈はいやらしいなあ.....そんなに好きなのか？ そんなに好きなら、たっぷり奥まで突き刺してやるよ、ほらっ」

アキトは両手でしっかりと玲奈の尻肉を掴むと、極太の肉棒で膣の奥を激しく突いた。

「ああああッ！」

ますます、スピードアップしていくアキトの腰の動きに、玲奈は悲鳴のような声をあげ続けた。

玲奈のその部分は、まるで独立した生き物のように、ざわざわと動いた。

膣内の肉襞が、何千もの微細な舌となって、アキトのペニスの表面をこそぐように刺激した。

「おお！ す、すごい！ 玲奈っ！」

ぶちゅっ、ぐちゅっという湿った音と、ぱんぱんっと肉のぶつかりあう音がさらに激しくなった。

絶頂の予感が、ぞくぞくぞくっ、と背筋を駆け上り、「イ.....ク.....っ！」

「あ、あッ！ ンあ！ あッ！ イ、イク！ イっちゃう！ いっくうううっ！」

「うく.....だめだっ！ 我慢できない！ 出すぞ！ 玲奈！ おおお！」

下腹部に、痛みを覚えるほどに充満していた熱い体液が、出口に向かって殺到する。

ぐうっ、とペニスが玲奈の中でひときわ膨張し、粘度の高い濃い精液がペニスの先端から勢いよく放出された。

びゅく！ びゅく！

玲奈はアキトのペニスが自分の体内で暴れたのを感じた。

「あああああっ」

体の中で迸る精液の感触に、玲奈が、歓喜の声をあげた。

そして、爪を立ててシーツに両腕でしがみついて、びくん、びくん、体を痙攣させた。

二人の動きが止まった。つい先ほどの淫らな嬌声が嘘のように、部屋は静寂を取り戻した。

「あ.....は.....ああ.....はあ.....っ」

しばらくして、忘れていた呼吸を思い出したように、二人は、息を整えた。

そして、快楽に潤んだ瞳で、お互いを見つめ合った。

「ああ.....アキト.....よかった.....」

玲奈はシーツに腹ばいになって尻を高く掲げたままぐったりしていた。

アキトが玲奈の膣穴からペニスを抜いた。

さっきまで太い肉棒が埋め込まれていた秘唇は、ぱっくりと口を開け、中に出されたアキトの精液がどろっと零れ出てきた。

「ああー気持ちよかった！ 溜まってたからなあ.....」

すっきりした声でアキトが叫んだ。

「いやだわ.....アキトって露骨」

玲奈は上体を起こすと、ティッシュで股間から溢れてくるアキトの精液を拭った。

（体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしくお願いいたします。）